学力向上フロンティアスクール中間報告書

都道府県名	福　岡　県

Ⅰ　学校の概要（平成１６年１月現在）

学校名	糟屋郡宇美町立宇美南中学校					
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	４学級	４学級	５学級	０学級	１３学級	２２人
生徒数	１３１人	１３８人	１７２人	０人	４４１人	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

自ら学びとる力を身につけた生徒を育てる授業の創造
～問題解決的な学習指導の工夫を通して～

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

○　すべての学年、すべての教科を研究推進の対象においている。

＜理由＞

・問題解決的な学習の展開には、大変多くの時間を必要とする。そのため、特定の教科においての実践には、物理的に授業時数での限界があり、年間に数回、この学習過程を仕組んだとしても、生徒の問題解決能力の高まりには、さほど期待が持てないと考えられるからである。

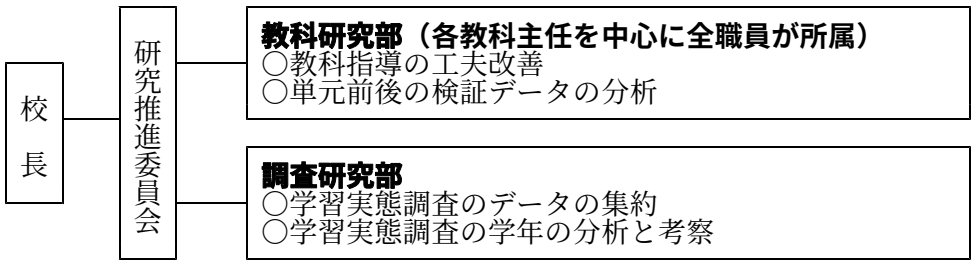
また、自ら学びとる力（学習課程で培われる問題解決能力）を高めるには、たとえば、国語や英語、技能教科においては表現や交流、数学や理科では、分析や思考、社会では分析や判断に重きをおくなど、教科の特性を生かしていくことも重要であり、すべての教科での実践が必要だと考える。

(2)　年次ごとの計画

平成15年度	○　テーマ 問題解決的な学習の課題を「つかむ」「追究する」段階で、各教科の特性を生かした指導方法の工夫を行なう。 ○　研究の見通し（仮説） 学習過程において、単元計画に、課題を「つかむ」「追究する」「解決する」「振り返る」の４つ段階を設定した問題解決的な学習の展開を工夫し、個に応じた指導方法の工夫・改善を行えば、生徒は自ら学びとる力を身につけることができるであろう。 ○　研究の内容・方法 １　主題研究に基づく授業改善　＜考える授業の創造＞を推進する。 (1)　問題解決的な学習を通しての授業実践 ①　各教科において、問題解決的な学習に適した重点単元を設定する。 ②　単元計画の中に、教科の特性を生かした指導方法の工夫を講じる。 ③　単元仮説、本時の授業仮説に基づいた授業検証を行ない記録に残す。 (2)　指導方法工夫改善教員を生かした授業実践 ①　教師の役割を明確にしたＴＴ指導に取り組む。 ②　教科の特性に応じて、習熟度別、課題別の少人数指導の取り組む。 また、１の研究の推進のため、次に示す２，３の実践も同時に進めていく。 ２　指導と評価の一体化を生かした授業改善　＜わかる授業の創造＞ (1)　学習実態調査の分析を生かした授業実践 (2)　評価補助簿の活用を生かした授業実践 ３　学校・学年協働体制の充実 (1)　学校体制で取り組む日常的な指導 (2)　学年の実態に応じた学習指導 (3)　生徒の家庭学習の充実

平成16年度	○　テーマ 　問題解決的な学習の全段階（課題を「つかむ」「追究する」「解決する」「振り返る」の４つ段階）で、各教科の特性を生かした指導方法の工夫を行なう。 ○　研究の見通し 　問題解決的な学習の４つの段階を通して、生徒の課題意識・目的意識が連続する展開が図られているかを検証していく。 　問題解決能力の高まりよる生徒の学力の向上を目に見える形（数値として）で示せるようにする。 ○　研究の内容・方法 　１５年度の内容・方法に工夫、改善を加え発展させる。

(3)　研究推進体制



○研究推進委員会のメンバー
（校長・教頭・教務・研究主任・１学年委員・２学年委員・３学年委員）

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

(1)　問題解決的な学習の授業実践の分析に、生徒の変容が見えるような客観的データを可能な限り取り入れていくことで、生徒の実態がよく見えるようになってきた。
- 　単元レベルでの事前・事後アンケートの充実
- 　プレテスト・ポストテストの実施
- 　スモールステップによる学習内容の定着度合いの確認　など

(2)　各教科の問題解決的な学習の展開にふさわしい単元の絞り込みが行えた。また、問題解決的な学習の４つの段階でとれる有効な手だてを教科の特性を生かしながらまとめることができた。

(3)　「見えにくい学力」の測定のための評価方法の工夫が進んだ。
- 　「見えにくい学力」の高まりを見るためには、生徒の考えを表現したものを活用する。(学習ノート、学習プリント、作品、実験・観察レポートなど)
- 　補助簿を活用し、生徒の発言や様相の記録を充実させる。
- 　観点別の評価テストの実施をおこなう。
　(学力実態調査などを活用し、過去の全国データとの比較など)

(4)　学習実態調査によるわかる授業の創造が進んでいる。
- 　日々の授業は、生徒と教師で作り上げるという視点から見ると、生徒による教師の授業評価は定着し、その結果の分析を基に、各教師がわかる授業にするための様々な手だてを考え、授業を行なったことで、生徒への支援が充実してきた。

(5)　各学年独自で行なっている日常的な指導や学年の実態に応じた学習の取り組みをまとめることができた。

２．今後の課題

(1)　問題解決的な学習の４つの段階を通して、生徒の課題意識・目的意識が連続する展開が図られているかを検証していく必要がある。
(2)　問題解決的な学習の実施に伴う授業時間の確保をどうするか。
・　選択の時間の有効活用を考える。
(3)　補助簿の活用を充実させる。
・　単元の評価計画を立て､つまずき生徒への支援方法をさらに具体化させる。
(4)　研究組織の再検討を行なう。
・　評価の検討を行なう部会が必要と考える。
(5)　学習実態調査による授業評価の見直しを進める。
・　日々の授業は、生徒と教師で作り上げるという視点から見ると、生徒が授業に取り組む姿勢について、客観的なデータをとり分析する必要がある。
(6)　学年協働体制の確立を図る。
・　授業において学習内容の理解を深める手だてはいろいろと考えてきたが、その学習内容の定着をはかるための方策を、３年間を見通して検討する必要がある。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

生徒の学力の定着度合いを計る目的で、学力分析テストを実施
（町で予算化されている。）
１・２年生は年２回実施（４月、２月）
３年生は年４回実施（４月、１０月、１１月、１月）

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

・　平成１５年　９月２２日（月）　公開授業会（２学年）
・　平成１５年１０月２４日（金）　実践交流会（１・３学年）
・　研究成果普及のための中学校ＨＰの研究部分の更新
・　「本年度の実践指導案集」の作成と「研究のまとめ（成果と課題）」の冊子を作成している。
・　県内、県外のフロンティアスクール数校からの問い合わせに対して、資料の提供を行なう。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☑ １５年度からの新規校　☐ １４年度からの継続校

【学校規模】　☐ ３学級以下　☐ ４～６学級
☐ ７～９学級　☐ １０～１２学級
☑ １３～１５学級　☐ １６学級以上

【指導体制】　☑ 少人数指導　☑ Ｔ．Ｔによる指導
☐ その他

【研究教科】　☑ 国語　☑ 社会　☑ 数学　☑ 理科
☑ 外国語　☑ 音楽　☑ 美術　☑ 技術・家庭
☑ 保健体育　☐ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑ 有　☐ 無